高知英語学英語教育研究会
『英語と教育』第1号　所収論文

非項位置としての SPEC-T*

小林　亜希子
島根大学法文学部

Keywords: 主語, A/ A' 移動, 相対的局所性

1. Chomsky (2000, 2001) からの理論的帰結

Chomsky (2000, 2001) において, 極小理論の重要な修正がいくつか行われた。そのうちの一つが Agree による素性照合である。次のような構造がある場合,

(1) $[_{TP}$ T $[_{v*P}$ John v* $[_{VP}$ loves Mary]]]

外項 *John* はその格を照合・消去するために T の領域に移動しなくてよい。T が *John* を c 統御し二者が同じφ素性を持っていれば, これらは Agree の関係に入り, その関係のもとで解釈不可能な素性に値をあたえ, 消去することができる。

このアプローチが正しければ, 移動はもはや形式計算の一部であると見なせなくなる。例 (1) において, Agree (T, *John*) が起こった時に T が EPP 素性を持っていれば *John* が SPEC-T にまで移動するが, T 自体に EPP 素性を持つべき必然性はない。移動を起こす因子 (EPP) があるのはよいとしても, それがなぜあるのかについては改めて問い直す必要が出てくる。

Chomsky (2001) は移動が何らかの意味解釈を生じると論じている。特定の統語位置は特定の意味解釈 (INT, INT') に対応し, 要素は正しい解釈を得るため, または正しくない解釈を避けるために移動を起こす。その移動の統語的動機づけとして EPP 素性が義務的または随意的に付与されるのである。また, 意味解釈規則には言語差があると考えることで, 移動に関する言語差が説明される。

移動が意味解釈と結びついているとの立場に立つならば, 全ての統語移動の「意味」

を問い直す必要が出てくるが， wh 移動などの A'移動ならばその意味は自明であり，疑問量化などの量化解釈を作り出すための移動であると考えることができる。問題は A 移動の意味である。主語移動は従来，拡大投射原理や格付与といった形式上の要請から起こるとされた。しかしながら，前者はデータから導出された一般化に過ぎず，後者にしても Agree を採用する以上，格と移動は直接に結びつかない[1]。

本稿は，極小理論の枠組みの中で主語移動，主語位置がどのように説明されるべきかを英語データを基に考察する。「格を得る」ための移動と見なせない以上，主語移動はもはや A 移動とは言えない。そもそも A 移動自体が新しい極小理論の枠組みではあり得ない。本稿は，主語位置への移動が「主題」解釈へと写像される（候補を確保する）ために起こる A'移動であることを提案し， 2 節でこの提案が統語デザインにどう組みこまれているのかを考える。 3 節ではこの提案から得られる概念的な利点 2 つを提示する。 4 節では「主語位置= A'位置」の仮定から得られる経験論的な利点を考える。5 節では英語の「主語」と日本語の「主題」を簡単に比較し，統一的分析の可能性を指摘する。

2. 提案

2.1 主語の意味論：存在的前提（義務的）と主題解釈（デフォルト）

述語に対する項の θ 関係は基底生成位置によって表され (cf. Hale and Keyser (1993))，また格関係は格照合子 (T, v* など) との Agree によって決定できるため，項が移動によって A 関係を表す必要はもはやない。 SPEC-T への外項の移動は他の移動と同じく，何らかの新しい解釈を得るために起こると考えられる。

主語位置を占める要素が持つ「意味」の一つに，「存在的前提 (existential presupposition)」がある。次の例を見てみよう。

(2) a. *The King of France* visited the exhibition yesterday.

b. The exhibition was visited by *the King of France* yesterday.

(Sperber and Wilson (1995: 214) より改変)

現在の世界では， *the King of France* が指示する対象は存在しない。Strawson (1964) によると，(2b) が表す命題は偽の真理値を持つが，(2a) についてはそもそも真

偽を決めることができない。主語位置を占める要素には，その存在が会話参加者の間で了解済みであるという存在的前提解釈が付されるためである。（一方， (2b) で前提されるのは，会話参加者の間で特定可能な展示会が一つ存在することである。その展示会を昨日訪れた人のリストの中に「フランス国王」が入っていなければ，この文は偽である。）

このように，主語位置を占める要素は存在的前提解釈を持つ。また，このような前提があるため，文の主題（トピック）としての解釈を得やすくもなる。ここで注意すべきことが2点ある。一つは，「存在が前提されるもの＝旧情報」ではない，ということである。Lambrecht (1994: 25) が指摘するとおり，情報の新旧は命題との関係によって決まる。次のやりとりを考えてみよう。

(3) A: Who won the race?

B: I won the race.

A の発話によって，∃x.P(x)=「誰かがその試合に勝った」ことが前提（事実的前提）として談話に提出される[2]。B 文の主語 *I* が指す人物（つまりB）の存在は当然，会話参加者の間で了解されている。しかし，この主語は x の値を同定 (identify) する「新情報」である。このように，談話中ですでに ∃x.P(x) が前提として提出されている場合には，主語は存在的前提解釈を持ち，かつ新情報（フォーカス）である。もう一つ注意すべきことは，前提が談話中に実在しないのに，話し手が前提解釈を必要とする発話をすることもある，ということである。その場合，聞き手はそのような前提があるとの「見なし」をして文を解釈する（cf. Kuroda (1965 [1979]), Stalnaker (1973)）。逆に言えば，話し手は聞き手の「見なし」を期待して，前提が存在しなくても前提解釈の必要な文を発することができる。その場合の前提は「暗示」「含み」という形で聞き手に提示されると言える。例えば，話し手が次のような文を発した場合，

(4) *A man* is in the garden now.

聞き手は男性一人が談話の場に存在することを発話前から知っていたかもしれないし，この発話の意図が通じるように，男性一人が存在することを知っていたことにしてこの文

を解釈するかもしれない。つまり，主語の存在は，「事実」「見なし」のいずれかの形で会話参加者の前提知識とされるのである。

以上の議論をまとめて，主語にどのような談話情報が付与されるのかを図示する。

(5) 統語： $[_{TP}$ **[$_{SPEC}$ X]** T $[_{vP}$ …]]

↓ 写像

意味解釈部門：

(i) 前提　　存在的前提（義務的）

↓（談話内で他の要素がすでに前提である場合を除く）

(ii) 情報構造　　主題（デフォルト）

2.2 主語の統語論：[R] 素性の Agree と相対的局所性制約

英語の統語部門において，何が主語位置 (SPEC-T) を占めるかを選ぶことはできない。それは自動化（文法化）された統語操作である。そのメカニズムを次のように仮定する。統語移動が起こるにはまず素性の Agree が起こる必要がある。SPEC-T への移動が起こる際には，何らかの素性について Agree (T, DP) が起こっているはずである。この移動は主語の存在的前提解釈（ひいてはデフォルト状態での主題解釈）へとつながるのだから，素性はその解釈に関連するものであると考えられる。その素性を，次のように考える。主語に与えられる存在的前提解釈を持つことができるのは指示的 (referential) な要素のみである [3]。その解釈を与えられる可能性を持つ DP は然るべき素性 [R] を持ち，T の [R] 素性と Agree の関係に入る。さらに，T は義務的に EPP 素性を持ち，SPEC-T を満たさねばならない。次のような構造がある時，

(6) $[_{TP}$ T $[_{v*P}$ *John* bought *a book*]]

[R][EPP]　　[R]　　[R]

T が Agree する相手 (goal) の候補は 2 つあるが，派生の経済性からより近い候補である外項 *John* が選ばれる。EPP 素性によって *John* は SPEC-T にまで移動し，然るべき解釈を与えられる。(6) から他の派生が続く可能性 (*a book* の方が Agree の相手として選ばれるなど) はないので，必ず外項が主語となる。

この考えが正しいとすると，SPEC-T への移動は形式のための形式でなく，「存在的前提解釈（デフォルト主題）」という解釈上の要請から作られるものである。それが [R]素性とそれに付随する EPP 移動という形で文法化されているため，最上位項が必ず SPEC-T に動くのだが，「然るべき意味解釈を得られる位置に移動する」点では，主語移動は wh 移動などの A'移動と変わりがない。

もちろん，この新しい仮定を採用することで数多くの疑問，問題が出てくることが予想される。特に，格関係や束縛関係，繰り上げ構文，ECM，WCO，コントロールといった，従来の A/ A'区分によって説明してきた事柄がこの仮定のもとでどう説明されるのか，大きな問題として残る。本稿はこれらの想定される問題を考えるのではなく，この仮定を採用することで得られる概念的・経験論的な利点を指摘する。仮定を支持する利点があることが分かれば，想定される問題に対処する意義も出てくると考えるからである。

3節以降でこの利点を考えるが，その前に，後の議論に関係する局所性条件を定めておく。Manzini (1998) に従い，次のような相対的局所性制約が働くと考える。

(7) * probe1 … probe2 … goal

[X] [X] [X]

Agree

probe1 と goal が素性 [X] の Agree 関係に入ろうとするとき，同じ素性 [X] を持つ probe2 が介在すれば，その Agree は非合法的となる。ただし，Chomsky (2001) が提案するフェイズ (phase) 単位の文派生モデルを採用すると，goal は probe1 と局所的に Agree を起こせる位置にまで循環移動するので，局所性制約が goal のそれぞれの出現位置 (occurrence) にも適用されるように修正する。

(8) probe1 … $goal_i$ … probe2 … t_i'' … t_i' … t_i

[X] [X] [X] [X] [X] [X]

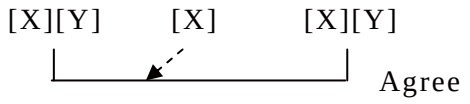
*

goal が素性 [X] について照合を行うべく (8) のような循環移動を行った時，(probe1, $goal_i$) だけでなく goal の出現位置同士 (($goal_i$, t_i''), (t_i'', t_i'), (t_i', t_i)) も素

性 [X] についての依存関係にあり, 相対的局所性を満たさねばならない。 (8) では, ($goal_i$, t_i'') の間に同じ素性 [X] を持つ probe2 が介在するため, この依存関係が局所性を満たさず非合法的となる。

Agree は複数の種類の素性について起こることが可能である。Manzini (1998) は, 次のような場合, 依存関係は合法的であると論じる。

(9) OK: probe1 … probe2 … goal



つまり, 依存関係に関わる素性が部分的にしか阻止されなければ, その Agree は合法的である。 Manzini はこの仮定により弱い島の制約が説明できるとしている。例えば, 指示的 wh 句は [Q] 素性以外にも別の素性を持つため, wh 島 (= [Q] 素性を持つ C) を越えて長距離依存関係を作ることができる。

(8), (9) より, 略式にではあるが次のように局所性制約を定める。

(10) 相対的局所性: Agree (probe, goal) が起こる時, probe と goal 及び goal のそれぞれの出現位置 (occurrence) は局所的関係になくてはならない。 Agree が一つまたは複数の素性について起こる時, それと同じ素性全てを含む probe が途中にあれば, その関係は局所性を満たさず, LF で非合法的と判断される。

また, Miyagawa (2001) の提案に従い, [+Q] C は疑問量化に関わる素性 [Q] だけでなく疑問詞の選択領域に関わる何らかの素性も随意的に持つと考える。Miyagawa はそれを [wh] 素性としているが, 選択領域を形成できるのは指示的な要素だけであることから, ここではさらに限定して [R] 素性とする。Miyagawa はこの仮定により日本語の wh 句と DP の作用域の関係が広く説明できることを論じているが, 本稿はこの仮定が英語にも当てはまると考える。従って, 本稿の前提では, [+Q] C, T のいずれもが [R] 素性を照合する probe となりうることになる。指示的 wh 句は [Q] [R] 2 つの素性を照合させる必要があるが, 局所性条件に違反しない限り, C, T いずれとも Agree が可能である。

3. 概念的利点

本稿の提案による概念的な利点は少なくとも 2 つある。一つは主語移動の「意味」を与えられることである。 1 節で論じたように，形式上の要請から移動が起こると考えることはもはや好ましくない。 EPP や格素性といった理論内の道具立てを前提にし，それを移動の原因と論じるのは単なる循環論法である。提案された分析に従えば， SPEC-T は解釈上の要請（の文法化）によって作られる位置だといえる。

もう一つは，主語位置の分布に関する問題が解決できることである。英語に限らず主語位置は A'位置に挟まれる形で分布する。

(11)　[Topic [Wh [(Focus) [Subject [Negation [Adverbial [VP]]]]]]]

A'　A'　A'　$\boxed{\text{A}}$　A'　A'　(A)

主語位置が何らかの文法関係を表す A 位置であると考えると，そのような基本的関係を表す位置がどうして A'領域に挟まれるような形で分布するのか分からなくなる。「SPEC-T = 存在的前提解釈を付される位置」と考えると，主語も一種の A'要素であることになる。主語が A'要素ならば， (11) で挙げた主語の分布に関する問題は初めから生じない。

4. 経験論的利点

「主語位置＝主格を得る位置」との従来の分析に従うと，外項と内項に決定的な違いは生じない。外項は主格を得，内項は対格を得るので基本的に対称的な操作を受けると予測される。しかしながら，「主語位置＝存在的前提解釈を付される位置」と想定すると，主語にのみ見られる統語的特徴が説明可能になる。

4.1 局所性

2 節の提案を受け入れることで，主語が直接･間接に関わる状況での局所性が広く説明できる。指示的な DP は [R] 素性を持つので，指示的 wh 句は [Q][R] という 2 つの素性を持つ[4]。

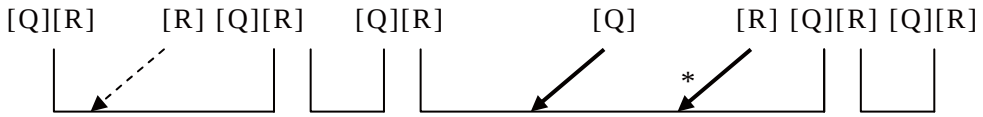
まずは時制の島を考える。

(12) a. ?**What* do you wonder [whether John bought *t*]?

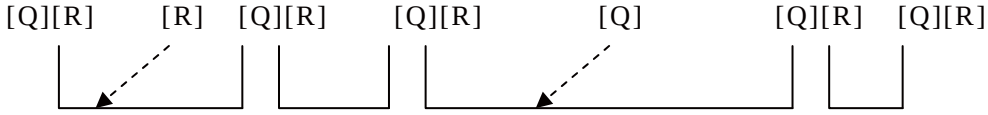
b. *What* do you wonder [whether to buy *t*]?

従来，この文法性の差は埋め込み節の T が持つ時制（より正確には一致）の有無が局所性に何らかの影響を持つために起こるとされてきた (cf. Chomsky (1986))。しかし，本稿の分析に従えば，文法性の差は主語位置 (SPEC-T) の有無によって説明することができる。Chomsky (2001) は，ϕ-complete T のみが EPP 素性を持つかもしれないと述べている。これが正しければ，不定詞節の T（T_{def}）は EPP を持たないことになる[5]。また [R] 素性は，SPEC-T に要素を移動させる道具立ての一部であるから，EPP がなければ [R] 素性もあるべき理由がない。従って，(12a, b) の LF 構造はそれぞれ次のようになる。

(13) a. $[_{CP}$ *what*$_1$ C $[_{TP}$ you T $[_{v*P}$ t_1''' ...$[_{CP}$ t_1'' $[_{CP}$ whether C $[_{TP}$ John T $[_{v*P}$ t_1' ... $t_1]]]$ [6]



b. $[_{CP}$ *what*$_1$ C $[_{TP}$ you T $[_{v*P}$ t_1''' .... $[_{CP}$ t_1'' $[_{CP}$ whether C $[_{TP}$ T_{def} $[_{v*P}$ t_1' ... $t_1]]]$



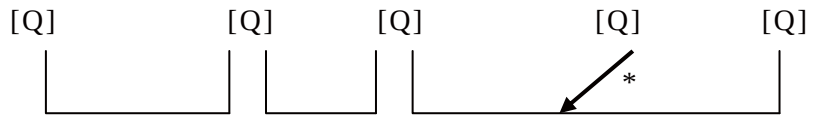
2 節で [+Q] C は [Q] だけでなく [R] 素性の照合も行えると仮定した。この場合，*what*$_1$ のそれぞれの出現位置は [Q], [R] 2 つの素性についての依存関係を作るので，この 2 つともが阻止される部分があれば局所性制約 (10) よりその Agree/Move が排除される。(13a) では正にそのことが起こっている。wh 句は最終着地点に入るまで全ての強いフェイズ (v*P, CP) の SPEC を経由して移動するが，埋め込み節の SPEC-C, SPEC-v* の間の依存関係 (t_1'', t_1') の間には [Q] 素性を持つ C, [R] 素性を持つ T の両方が存在するため，その依存関係が局所性制約に違反する。対して，(13b) で局所性違反は起こらない。T_{def} が [R] 素性を持たないため，(t_1'', t_1') の局所的関係が合法的と見なされるからである。

なお，非指示的 wh 句は時制のない wh 島からであっても抜き出せない。次の例を

見てみよう。

(14) a. *Why_1 do you wonder [whether to buy the book t_1]?

b. [$_{CP}$ why_1 C [$_{TP}$ you T [$_{v*P}$ t_1'' … [$_{CP}$ t_1' [$_{CP}$ whether C [$_{TP}$ T_{def} [$_{v*P}$ t_1 …]]]



この事実は次のように説明される。非指示的 wh 句は [R] 素性を持てず，C との依存関係には [Q] 素性のみが関わる。T の持つ [R] 素性の有無に関係なく，途中に [Q] 素性を持つ probe が一つあればそれだけで依存関係が非合法的と見なされる。従って，(14b) の長距離依存関係は許されず，(14a) は非文となる。

次に，主語の島について考える。目的語 DP から wh 句を抜き出すことは (15a) のとおり許される。しかし，主語 DP からの抜き出しは (15b) のとおり許されない（主語の島）。

(15) a. *Who* did you see [a picture of *t*]?

b. **Who* did [a picture of *t*] surprise Mary?

主語も目的語と同じく A 位置を占めると考えると，どうして (15) のような摘出領域の非対称が生じるのか疑問が残る (cf. Huang (1982), Manzini (1992))。しかし本稿の分析に従えば，主語は A'位置であるから，付加詞や複合名詞句の島と同様，「A' 位置からの要素の抜き出しはできない」という一般性の高い制約から (15b) の非文法性が説明できる[7]。

さらに，主語と目的語の抜き出しに関する非対称も説明できる。

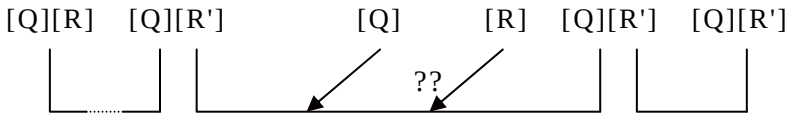
(16) a. ??*Which picture*$_1$ does John wonder [whether Bill saw t_1]?

b. **Which picutre*$_1$ does John wonder [whether t_1 will be on sale]?

(12a) で見たとおり，時制のある wh 節から wh 句を抜き出すことは難しいが，wh 句が D-link されていれば多少文法性が上がる ((16a))。ただし，これは主語 wh 句の抜

き出しには当てはまらない ((16b))。なぜ D-link が文法性を改善するのか，正確な分析は現在のところ明らかでない。少なくとも， D-link によって wh 句の指示性 (referentiality) が変わることが原因であることは確かなので，差し当たり次のように説明しておく。 D-link のない素性を [R] とすると， D-link された素性は [R'] へと変化を起こす。 従って (16a) における長距離依存関係は以下のようになる。

(16a)' [$_{CP}$ *which picture*$_1$ C … [$_{CP}$ t_1'' [$_{CP}$ whether C [$_{TP}$ Bill T [$_{v*P}$ t_1' …. t_1]]]]



主節の C と *which picture*$_1$ は [Q][R] 2 つの素性の Agree を起こす。この時， (t_1'', t_1') の間には [Q], [R] 素性を持つ probe がそれぞれ存在するので，本来ならば局所性違反を起こすのだが， wh 句の [R] 素性が D-link によって変質しているために T の [R] と wh 句の [R'] が完全には重ならない。これにより， (t_1'', t_1') は LF での破綻を辛うじて免れる。その結果，文法性は落ちるものの (16a) は容認可能な文となる。別の説明も考え得るが，いずれにしても D-link による指示性への影響があるはずである。

しかし， D-link による効果は主語 wh 句抜き出しには見られない。この事実は本分析より次のように説明される。外項 wh 句は wh 移動に先んじて主語移動を行うが，この時に D-link された [R'] 素性が照合・消去されてしまう。

(16b)' [$_{TP}$ *which picture*$_1$ T [$_{v*P}$ t_1 be on sale]]

[Q] ~~[R']~~ [R]

ここから wh 移動する時，主節の C と Agree するのは [Q] 素性だけである。従って， wh 句が D-link されているか否かはもはやこの時点では関係なく， (16b)'' のように途中に [Q] 素性を持つ probe があれば局所性制約に違反して非文となる。

(16b)’’ [$_{CP}$ *which picture*$_1$ C …. [$_{CP}$ t_1' [$_{CP}$ whether C [$_{TP}$ t_1 T …..]]]

[Q] [Q] [Q] [Q]

*

最後に,（いわゆる）A 移動と A' 移動の局所性の非対称について見る。A' 移動は A' 位置を越えて起こることが可能だが，A 位置を超える A 移動は決して許されない。

(17) a. *What*$_1$ do you wonder [*how* to repair t_1]?

A' OK

b. **John*$_1$ seems that *it* was told t_1 [that ….].

A *

従来は A 移動と A'移動で異なる局所性条件を立てるなどしていたが (cf. Rizzi (1990)) ，本分析に従えば統一的に説明できる。時制の島の所で説明したとおり，指示的 wh 句は [Q][R] 2 つの素性を持つので，途中に [+Q] C だけがあっても局所的関係を阻止できない。従って (17a) のような A'位置を越える wh 移動は許される可能性がある ((13b) 参照)。対して (17b) の場合，A 移動は [R] 素性 1 つだけの Agree に関係して起こる。この依存関係は途中に [R] 素性を持つ probe があることで完全に阻止される。

(18) [$_{TP}$ *John*$_1$ T [$_{v*P}$ t_1''' … [$_{CP}$ t_1'' that [$_{TP}$ *it* T-was [$_{v*P}$ t_1' [$_{VP}$ told t_1 …..]]]

[R] [R] [R] [R] [R] [R]

*

従って，A 位置を越える A 移動が決して許されないことが説明される。このように，A 移動も A' 移動も同じ局所性条件 ((10)) で説明することができる[8]。

以上，主語移動を主題解釈に関わる A' 移動と見なすことで，これまで個別的にしか対処できなかった局所性の諸現象が統一的に説明できることを見た。

4.2 主語に課される意味論的制約

SPEC-T を占める DP は必ず主格を持つが，SPEC-T への移動が必ずしも格を得ることを目的としないことが次のような擬似受動文の例から分かる。

(19) a. *This book* has been frequently referred [to *t*].

b. *This bed* was slept [in *t*] by Napoleon. (安藤 et al. (1993:193))

主語位置に動いた DP は前置詞から斜格を受けているので，格を得るために移動する必要はない[9]。(19a) の [to *t*] は *refer* の補部なので，主語移動を再分析によって説明する可能性はある。しかし，(19b) の付加詞 [in *t(this bed)*] の受動化を再分析で説明することはできない。このような受身文を Davison (1980)，影山 (2009) にならって「異常受身文 (peculiar passive)」と呼ぶことにする。*This bed* の移動は明らかに格照合とは関係がない。「主語移動＝格移動」とする従来の分析では，異常受身文の主語移動を説明することができない。本節では，提案した分析によって (19b) の受身文の派生とその主語の意味解釈がどのように説明されるのかを示す。

異常受動文はいつでも容認される訳ではない。Davison (1980) によると，主語に関して次のような語用論的含意が与えられるときに容認度が高くなる。

(20) a. イベントの結果，主語が何らかのダメージを受ける。

b. (イベントの行為者が有名人であるとき) そのイベントに関係する主語にも何らかの価値づけがもたらされる。

c. 主語が，そのイベントの発生を潜在的に可能にするだけの性質を持っている。

(19b) について言うと，この受動文は，主語 *this bed* が，ナポレオンが寝たことによって付加価値を持つようになったことを感じられるために容認される。

また，Shibatani (2006) によると，文の態を決めるとき (あるいは文が意味解釈部門で処理されるとき) 次の制約が課せられる。

(21) 能動/受動対立 (active/passive opposition)

その行為は，談話の関連性が極端に低い (あるいは，少なくとも対象 (patient)

より低い)行為者によるものか？

Yes → 受動態

No → 能動態　　(Shibatani (2006: 248))

この対立は典型的な受動文について提案されたものであるが，異常受身文についても当てはまると考えられる。

Davison (1980), Shibatani (2006) の議論をふまえ，(19b) における主語移動および意味解釈制約を説明する。まず統語派生であるが，*this bed* は DP であるので素性 [R] を持つ。T と *this bed* の間には他に [R] 素性を持つ要素がないから，Agree (T, *this bed*) が起こり，T の [R] 素性に付随する EPP 素性に駆動されて *this bed* が SPEC-T に移動する。

次に，派生主語の意味解釈を考える。なぜ，異常受身文の主語は，普通の受身文の主語と異なり，(20) のような語用論的含意を持たねばらないのだろうか。述語との結びつきの強さという観点から考えると，非項は述語の必須要素ではないため，話し手が描写しようとしているイベントそのものへの関連性が低い。従って，発話文が語用論的含意を持たず，明示的意味だけが伝達される場合，非項要素への関心度は低いはずである。例えば，会話参加者が *John* よりも *Mary* に関心を持っている談話では (22a) のような言い方はせず，(22b) のように *Mary* を項とする述語を選んで文を作るだろう。

(22) a. John got the job done with the help of Mary.

b. Mary helped John get the job done.

非項位置にある要素 X が受動文の主語になる場合，(21) の制約より X は会話参加者の関心度，つまり談話における関連性が高いはずである。しかし，明示的意味において非項が項よりも目立つことはない。こういう場合は，我々の語用論知識によって，文に明示されていない特徴づけが X に与えられる(と感じられる)ときに，制約 (21) が満たされ，容認度が高くなる。そのような特徴づけが (20) であると考えられる。

まとめると，非項要素が [R] 素性を持ち，T と Agree するとき異常受身文は合法的に派生される。主語には，その統語位置より「存在的前提」ひいては「(デフォルト)主題」の解釈が付与されるが，受身文であることから別の意味的制約 (21) も課される。描写

されるイベントにおいて非項は脇役的存在であるため，制約 (21) を非項の主語が満たすことは難しく，(20) のような語用論的含意のある場合に限られる。以上，簡潔にではあるが，提案された分析によって異常受身文の統語論と意味論が扱えることを示した。

5. 日本語の「主題」との関係

英語のような主語卓越言語 (subject-prominent language) の主語が「文法化された主題」(Li and Thompson (1976: 484)) であることは昔から指摘されてきた。本稿の主張は，その文法化に指示的要素の持つ [R] 素性が関わるというものである。文法化によって「主語＝主題」の保証は失われたが，主題の必要条件である「存在的前提」が与えられ，デフォルトの状態では主題として解釈される。この提案によって得られる概念的，経験論的な利点があることを 3-4 節で考察した。

この分析が従来の主語分析にとって代わる前には解決すべき問題が多く残っているが，最後に英語の「主語＝デフォルト主題」と日本語の「主題」を統一的に説明する可能性を指摘しておきたい。英語の「主語」と日本語の「主題」は次の点で大きく異なる。

(23)

	英語「主語」	日本語「主題」
a.	SPEC-T を占める	占めるべき位置の指定はなく， 助詞「ハ」がついて主題を標示する[10]
b.	必ず 1 ついる （＝形式主語がいる）	なくてもよい
c.	1 つしかない	2 つ以上あってもよい
d.	最上位項が選ばれる	どの項が選ばれてもよい
e.	T との形態的一致を起こす	起こさない

英語の主題と日本語の主題は異質であり，全く異なるプロセスで形成されると考えることも可能である。しかしながら，二者は同じものであり，(23) は統語派生のパラメター的相違から派生されるに過ぎないと考える可能性もある。統一的な説明を可能にするという点ではこの考えを追求するほうが好ましいと言える。

(23e) は T と DP の Agree の効果を形態にどう反映させるかという形態論の問題なのでさておき，その他の違いは次のような統語メカニズムの違いから派生すると考えて

みる。

(24)

	英語	日本語
a. 主題解釈: (デフォルト)	SPEC-T（位置）	「XP-ハ」（形態）
b. T の[R] 素性:	EPP が付随	EPP なし
c. 動詞繰り上げ:	なし	あり

(24a) のとおり, (他に候補がないデフォルト状態において)主題解釈は英語では特定の統語位置を占める要素に, 日本語では特定の形態を持つ要素に与えられる。また, 英語の T が [R] 素性を持つとき, 必ず EPP が付随する(よって主語移動が起こる)が, 日本語にはそれがない ((24b))。また, 日本語では V-to-T の繰上げが存在することが先行研究で指摘されている (cf. Otani and Whitman (1991))。 Chomsky (1995) の「等距離」の概念が保持されるならば, 日本語の述語項は全て, この繰上げによって T から等距離になると考えられる。

このことから (23a-d) の諸性質が帰結する。 (23a) は (24a) の主題解釈方法の違い(とその統語的反映である (24b))から説明される。また, 主題としてふさわしい要素がない場合の対処の仕方も日英語で異なる。英語では (24b) を満たす必要から, 虚辞を挿入することによって「主題なし」の情報を表すのに対し, 日本語では単に「ハ」のつく要素を作らないことによって「主題なし」の情報を表す。さらに, 動詞繰り上げのない英語では内項よりも外項のほうが T に近いので, T は常に外項を誘引する。対して日本語では, 動詞繰り上げによって外項, 内項または動詞の時空間項 (spatio-temporal argument) を飽和させる場所・時間項の全てが T から等距離となる。従って, それらの項はいずれも T との Agree を経て主題認定(「ハ」標示)を受けられる。 (23c) に関しては次のように説明される。英語の T は 1 つしか EPP を持たないので, 1 つしか主題を作れない。対して日本語の場合,「ハ」を付けるだけでよいので複数の主題を作ることが可能である。(ただし, 二つ目の主題は一つ目の主題を限定する意味でしか解釈できない。つまり, 対比的解釈を受ける焦点句として解釈される。)

以上, SPEC-T を主題解釈のための位置と仮定することで得られる概念的・経験論的な利点と, 日本語の主題とパラレルな分析を行う可能性について概観した。

＊この小論は，日本言語学会第 112 回大会（2001 年 6 月 24 日，於：一橋大学）で行った口頭発表「極小理論における主語移動の意味」をもとに執筆したものである。極小理論はその後新たな展開を見せており，この論文が拠って立つ理論的枠組みは Chomsky (2007) などで提案されている最新の枠組みに比べるとやや古くなったことは否めない。しかし，極小理論の枠組みの中で EPP や主語移動の意義をどう捉えるべきかという問題は今日も残っている（Richards (2006), Miyagawa (2010) の議論を参照）。本稿の提案は，その問題への一つの解答としてまだ有効であると考える。発表当時の基本的なアイデアを活かすため，あえて発表当時の理論的枠組みを用い，内容の修正は最小限におさえた。ただし，書誌情報は最新のものに訂正している。

本稿を修正するあたり，2 名の匿名査読者の方から，用語や議論に関する不明瞭な点の指摘と，貴重なご助言をいただいた。記して感謝したい。言うまでもなく，本稿におけるいかなる不備もその責任は筆者一人にある。

注

1. いくつかの先行研究でも A 移動の問題点が指摘されている。Martin (1999), Ormazabal (2000) 参照。

2. また，「そのような人が存在すること」も前提されるので，主語 *who* の存在的前提解釈があるとも言える。

3. 「指示的 (referential) な要素」とは，Rizzi (1990: 86) の言う “referential index” を持つ要素のことであると解釈されたい。定的 (definite)・指示的 (demonstrative) という意味ではない。

4. ここでは格素性のことは考えない。Chomsky (2000, 2001) によると，格素性はφ素性照合の “reflex” として照合・消去される。Manzini and Roussou (2000) は格素性そのものを破棄する分析を提案している。格が存在するのは事実だとしても，その現れ方については再考される必要がある。

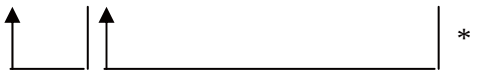
5. 査読者のお一人から，(12b) の付加詞節 T は PRO にゼロ格を付与するため，φ-complete と考えられるのではないかとのご指摘をいただいた。本稿は Kobayashi (2003) の分析を採用し，不定の T は全てφ-defective であると考えている。PRO の格標示などの議論については Kobayashi (2003) を参照されたい。

6. 下の (14) で見るとおり, 疑問節の C は [R] 素性を持たない非指示的 wh 句とも Agree できる。従って, 疑問節 C の [Q] 素性は義務的だが, [R] 素性は随意的である。(13a, b) は, (i) 主節 C が [Q][R] 両方の素性を持ち, (ii) 埋め込み節 C が [Q] しか持たない場合を示している。これ以外の組み合わせでは, (12a, b) の派生はいずれも相対的局所性制約に違反し, 破綻する。

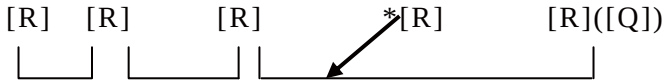
7. A' 位置からの抜き出しがなぜ許されないのかの問題はここでは論じない。極小理論の枠組みで強い島制約を分析する試みとしては, 大庭 (1998) 参照。

8. 過剰繰り上げを行う主語が wh 句で, [R] のほかに [Q] 素性を持っている場合も正しく排除できる。

(i) a. **Who*$_1$ t_1 seems that *it* was told t_1 [that …]?



b. [$_{CP}$ *who*$_1$ C [$_{TP}$ t_1''' T [$_{v*P}$ t_1' …[$_{CP}$ t_1'' that [$_{TP}$ it T-was told t_1 ….]]]]



主節 T と *who*$_1$ は [R] 素性についてのみ依存関係を形成するので, 途中に [R] 素性を持つ probe（埋め込み節 T）があればその依存関係は非合法的となる。

9. (19) を派生する際, EPP を DP 移動で満たす必要はないので, 虚辞挿入で満たしてもよいと予測される。しかし, 実際にはそのような文は排除される。

(i) **There/It* has been frequently referred to a book.

この非文法性は次のいずれかの考えによって説明されると思われる。まず, 英語に TH/EX のような文体ルールがあるとすれば (Chomsky (2001)), 音韻上の理由により内項の外置が起こらねばならず, “There has been *a book* frequently referred to.” の語順が義務的となるのかもしれない。あるいは, 虚辞 *there*, *it* はそれぞれ然るべき NP, CP から認可されねばならないが (Lasnik (1999)), (i) の *a book* は(コピュラ文でないなどの理由から)認可子として不適切であるのかもしれない。

10. 「DP ハ」が「トピック位置」のような特定の統語位置を占めないことは Tateishi (1994) の議論を参照されたい。

引用文献

安藤貞雄, 天野政千代, 高見健一 (1993)『生成文法講義－原理・パラメター理論入門』東京:北星堂書店.

Chomsky, Noam (1986) *Barriers*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2000) Minimalist inquiries: The framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2001) Derivation by phase. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A life in language*, 1-52. Cambridge, MA: MIT Press.

Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces+recursion=language? Chomsky's minimalism and the view from syntax-semantics*, 1-29. Berlin: Mouton de Gruyter.

Davison, Alice (1980) Peculiar passives. *Language* 56: 42-66.

Hale, Ken and Samuel J. Keyser (1993) On argument structure and the lexical expression of syntactic relations. In: Ken Hale and Samuel J. Keyser (eds.) *The view from Building 20*, 53-110. Cambridge, MA: MIT Press.

Huang, C-T James (1982) Logical relations in Chinese and the theory of grammar. Doctoral dissertation, MIT.

影山太郎 (2009)「言語の構造制約と叙述機能」『言語研究』136: 1-34.

Kobayashi, Akiko (2003) PRO as nominative anaphor. *English Linguistics* 20: 143-168.

Kuroda (1965 [1979]) *Generative grammatical studies in the Japanese language*. Doctoral dissertation, MIT. Reprinted, New York: Garland Press, 1979.

Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form*. Cambridge: Cambridge University Press.

Lasnik, Howard (1999) *Minimalist analysis*. Malden, MA: Blackwell.

Li, Charles N. and Sandra A. Thompson (1976) Subject and topic. In: Charles N. Li (ed.) *Subject and topic*, 458-490. New York: Academic Press.

Manzini, Maria Rita (1992) *Locality: A theory and some of its empirical consequences*. Cambridge, MA: MIT Press.

Manzini, Maria Rita (1998) A minimalist theory of weak islands. In: Peter Culicover and Louise McNally (eds.) *Syntax and semantics 29: The limits of syntax*, 185-209. New York: Academic Press.

Manzini, Maria Rita and Anna Roussou (2000) A minimalist theory of A-movement and control. *Lingua* 110: 409-447.

Martin, Roger (1999) Case, the Extended Projection Principle, and minimalism. In: Samuel David Epstein and Norbert Hornstein (eds.) *Working minimalism*, 1-25. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, Shigeru (2001) EPP, scrambling and *wh*-in-situ. In: Michael Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in language*, 293-338. Cambridge, MA: MIT Press.

Miyagawa, Shigeru (2010) *Why agree? Why move?* Cambridge, MA: MIT Press.

大庭幸男 (1998)『英語構文研究ー素性とその照合を中心にー』東京:英宝社.

Ormazabal, Javier (2000) A conspiracy theory of Case and agreement. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by step: Essays on minimalist syntax in honor of Howard Lasnik*, 235-260. Cambridge, MA.: MIT Press.

Otani, Kazuyo and John Whitman (1991) V-Raising and VP-ellipsis. *Linguistic Inquiry* 22: 345-358.

Richards, Marc (2006) On feature-inheritance: An argument from PIC. Ms. University of Massachusetts.

Rizzi, Luigi (1990) *Relativized minimality*. Cambridge, MA: MIT Press.

Shibatani, Masayoshi (2006) On the conceptual framework for voice phenomena. *Linguistics* 44: 217-269.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1995) *Relevance: Communication and cognition*. 2nd ed. Oxford: Blackwell.

Stalnaker, Robert (1973) Pragmatic presuppositions. In: Milton K. Munitz and Peter Unger (eds.) *Semantics and philosophy*, 197-213. New York: New York University Press.

Strawson, Peter F. (1964) Identifying reference and truth values. *Theoria* 3: 96-118.

Tateishi, Koichi (1994) *The syntax of 'subjects'*. California: CSLI & Tokyo: Kurosio Publishers.